

シリーズ「乳がん」②

「検診の種類と高濃度乳房」

独立行政法人国立病院機構和歌山病院

放射線科 照射主任 菊川 絢子

日本で行われている乳がん検診には「対策型」検診と「任意型」検診があります。対策型検診は国や行政が行っており、対象集団全体(地域住民)の乳がん死亡率を減少することを目的としています。一方、任意型検診はいわゆる人間ドックで、受診するかどうかは個々での判断となります。乳がん死亡率の減少という結果を証明できているのは現在のところマンモグラフィ検診のみのため、公的資金(税金)を利用した対策型検診ではマンモグラフィと視触診の併用法を採用しています。しかし、マンモグラフィのみではがんの有無を判別しにくい場合があり、一部メディアでも話題となつていま

す。日本で行われている乳がん検診には「対策型」検診と「任意型」検診があります。乳腺密度が濃いマンモグラフィ画像では全体が白く写り、同じく白く写るがんを見つけにくくなります。特に日本を含むアジアの比較的若い40歳代の女性は高濃度乳房の比率が高いことがわかっています。

マンモグラフィのみで判別しにくい理由として、大きく関わっているのが乳房の構成です。乳房の構成は大きく分けて乳腺実質と脂肪組織の2つから成り立っています。乳腺実質が多いことを「乳腺密度が濃い」と言い、乳腺密度が濃い順に、高濃度、不均一高濃度、乳腺散在、脂肪性

ているため、受診者への対応が異なるのは当然ともいえます。しかし日本でも保険制度はそのままで、乳腺密度を受診者に知らせようという動きがでており、今後は通知されるようになる可能性もあります。

近年では高濃度乳房の乳がん発見率を向上させる検査として、超音波検査、乳房トモシンセシス、乳房MRIが有力な候補となっています。いずれの検査も高濃度乳房に追加すると乳がん発見率は向上すると考えられており、特に乳腺エコーと乳房トモシンセシスは、前述の乳腺密度を受診者に通知するといった試みと合わせて、対策型乳がん検診に組み込むとする動きもあります。しかし、どの検査も乳がん検診の本来の目的である乳がん死亡率を減少させる効果はまだ証明されていません。今後の研究結果が待たれます。

マンモグラフィのみで判別しにくい理由として、大きく関わっているのが乳房の構成です。乳房の構成は大きく分けて乳腺実質と脂肪組織の2つから成り立っています。乳腺実質が多いことを「乳腺密度が濃い」と言い、乳腺密度が濃い順に、高濃度、不均一高濃度、乳腺散在、脂肪性

高濃度乳房の告知を法令化している国はありません。米国では約半数の州で高濃度乳房の告知が行われるようになっていますが、日本と同じく対策型乳がん検診を施行している欧州30か国では高濃度乳房の告知を法令化している国はありません。ここで注意しなければならぬのは米国の乳がん検診は全て任意型検診であるということですが、高額の費用を実費で払い、自分で選択して検診を受診する米国と、公的資金を利用した対策型検診が前面にある日本や欧州とは、そもそも保険制度が異なっており検診に対する考え方も違っ

今回の検診と高濃度乳房についてお話ししました。一言に乳がん検診といっても様々な要素があり、皆さんには乳がん検診を受ければがんの心配はないということではなく、検診の種類やご自身の乳房の状態によっては追加検査を行ったり、医療機関を受診する必要があることを、この機会に知っていただければと思います。